

9月予報（全13枚）

病防第79号  
平成21年8月28日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成21年度発生予察情報第6号を下記のとおり発表したので送付します。

平成21年度発生予報第6号（9月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成21年8月21日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	30	50	20
降水量	九州北部全域（含、山口県）	40	30	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
普通期 水 稻	穂いもち	やや多	やや多	茶	炭疽病	並	やや多
	紋枯病	やや多	並		チャノカモノハシ	並	並
	ヒゲハダニ	多	多		チャハマキ	並	並
	カメムシ類	やや多	やや多		チャノホソガ	並	やや多
大豆	ハダニヨリ	やや多	並		チャノイロアザミ	やや多	やや多
	カメムシ類	やや多	並		チャノミドリハダニ	並	並
かんきつ	かいよう病	やや少	やや少	ナ シ	かんきつハダニ	やや少	やや少
	黒点病	やや少	少		黒星病	やや少	やや少
	ミカンハダニ	並	並		うどんこ病	少	少
	チャノイロアザミ	やや少	やや少		ハダニ類	並	並
カキ	炭疽病	少	少	果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	並

作物	病害虫名	発 生 量		作物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	少	少	夏秋 果菜類	コナジラミ類	並	並
	すすかび病	やや多	-		アザミウマ類	やや多	並
	灰色かび病	並	並	冬春 果菜類	タバココナジラミ	-	並
夏秋 ナス (平坦地)	すすかび病	並	並		イチゴ	やや多	やや多
	うどんこ病	並	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	コナガ	やや少	並
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並		野菜全般	ハスモンヨトウ	並
	うどんこ病	やや多	やや多		オオタバコガ	並	並
夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病、軟腐病等)	並	やや少				

### 3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

#### イネ（普通期）

##### 1) 穂いもち

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉いもちの発病株率は7.8%(平年4.4%)と平年よりやや多かった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の葉いもちの発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並で、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、上位葉に病斑が見られるほ場では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

##### 2) 紋枯病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率3.5%(平年2.4%)と平年よりやや多い発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並で、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、穂ばらみ期の発病株率が要防除水準(発病株率20%)に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。普通期水稻においても、上位葉鞘へ病斑が伸展している場合は防除を行う。

### 3) トビイロウンカ

#### (1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、10株当たりの寄生頭数 4.4 頭（平年 0.6 頭）と平年より多かった。

イ 予察灯への誘殺数は、生産環境研究所（合志市）で7月は平年よりやや多く、8月は平年よりやや少なかった。天草農業研究所（天草市）では、7～8月は平年より少なかった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 生産環境研究所（合志市）における 8月 17日現在の払い落とし調査（無防除田）では、成幼虫数が 102 頭/10 株（H20：0.0 頭、H19：2.2 頭）と前年および前々年に比べて多かった。

(3) 対策 ア 本年は、ほ場や地域によって発生量の差が大きいのので、ほ場での発生状況を確認し、要防除水準に達したら直ちに防除を行う（要防除水準：収穫 30 日前で株当たり 3 頭）。

イ 現在、若令幼虫の発生が平年より多く見られるため、特に普通期および晩期水稻では出穂前までの適期に防除する。

ウ 出穂以降の防除は株元への到達度が劣るので、粉剤及び液剤で防除する際は株元へ付着するよう丁寧に行う。

### 4) カメムシ類

#### (1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 生産環境研究所（合志市）の予察灯における 8月の誘殺数は、はクモヘリカメムシ、アオクサカメムシ、シラホシカメムシ、アカスジカスミカメでは平年並であったが、ミナミアオカメムシは 101 頭（平年 27.4 頭）と平年より多かった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

(3) 対策 ア 常発地帯では、穂揃い期とその 7 日～10 日後の 2 回防除を行う。

イ イネ科雑草（エノコログサ、ヒエ類、メヒシバ）が繁茂、出穂している休耕地等が近くにある場合には、被害を受けやすいので本田の発生状況に注意する。なお、出穂期以降に周辺の除草を行うと、雑草から水田へ飛来し、被害を助長することがあるので、除草は控える。

## 大豆

### 1) ハスモンヨトウ

#### (1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、幼虫数で 13.8 頭 / 10 株（平年 10.8 頭 / 10 株）白変葉数で 3.3 株 / 100 株（平年 2.1 株 / 100 株）と平年並の発生であった。

イ フェロモントラップによる 8月の誘殺数は、い業研究所（八代市）、阿蘇市波野で平年比多、高原農業研究所（阿蘇市）で平年比やや多、生産環境研究所（合志市）で平年並、山都町鶴底で平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想で、発生に好適な条件である。

(3) 対策 ア 初期の食害発生に注意するとともに、白変葉（若齢幼虫による白色化した被害葉）が認められたら防除を行う。なお、ほ場によって発生状況が違うため、防除適期を逃がさないようにほ場をよく見回り、発生を認めたら早めの防除に心がける。

イ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、防除効果の高い若齢幼虫期に防除を行う。

ウ 8月に発生が少なかったほ場でも、9月に入り急激に多発することがある

ので今後の発生に注意する。

## 2) カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生頭数は  $0.1 \text{ 頭} / \text{m}^2$  ( 平年  $0.4 \text{ 頭} / \text{m}^2$  ) と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯調査では、ミナミアオカメムシの誘殺数 101 頭(平年 27.4 頭)と平年比多、アオクサカメムシは 87 頭(平年 89.8 頭)と平年並である。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想で、発生に好適な条件である。

(3) 対策 ア 少発生でも被害が大きいため、開花終期～子実肥大期にかけて防除を行う。

イ カメムシ類の発生は、ほ場間差が大きく、近隣に発生が確認されなくても多発することがあるので注意する。

## 茶

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、病葉数は  $10.8 \text{ 葉} / \text{m}^2$  ( 平年  $7.9 \text{ 葉} / \text{m}^2$  ) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいため、萌芽～3葉期に防除する。

### 2) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は  $1.6 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ( 平年  $1.1 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ) と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)及び茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、8月1半旬に平年より高いピークが認められたが、その後は少なく推移している。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽期に若齢幼虫を対象に防除を行う。

### 3) チャハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数  $0.3 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ( 平年  $0.0 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ) と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、8月2半旬に平年より高いピークが認められたが、その後はやや少なく推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、8月1半旬に平年より高いピークが認められ、4半旬も平年比やや多の誘殺状況である。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

オ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽期に若齢幼虫を対象に防除を行う。

#### 4) チャノホソガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は5.3枚/m<sup>2</sup>(平成2.1枚/m<sup>2</sup>)と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、平成並に推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、8月4半旬に平成比多の誘殺状況である。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～少であった。

オ 気象予報によると、9月の降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア 新葉にのみ産卵するため、秋芽萌芽期に防除を行う。

イ 三番茶不摘採園では発生が多くなりやすいので注意する。

#### 5) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は6.5%(平成2.1%)と平成比やや多の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の黄色粘着トラップでは、平成よりやや多い発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、8月3半旬は平成比多の発生であったが、4半旬には平成並であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～並であった。

オ 気象予報によると、9月の降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

#### 6) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は1.2%(平成2.3%)と平成並の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、平成よりやや少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

#### 7) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は0.4%(平成2.9%)と平成より少ない発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の寄生葉率調査では、平成比少の発生である。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア 9月は発生が多くなる時期で、今後、発生の好適条件が続くことも予想されるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら早めの防除に心がける。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### カンキツ

##### 1) かいよう病

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率 1.3 % ( 平年 3.4 % )、発病果率 3.8 % ( 平年 7.2 % ) と平年比やや少の発生であった。
- イ 果樹研究所 ( 宇城市 ) の 8 月 4 半旬の調査 ( 無防除樹甘夏 ) では、春葉での発病を認めず ( 平年 6.2 % )、発病果率は 12.0 % ( 平年 33.2 % ) と平年比やや少の発生であった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多 ~ やや少であった。
- エ 気象予報によると、9 月の降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 夏秋梢のミカンハモグリガ食害痕に本病が発生しやすいので、防除を徹底し、発病した葉・枝・果実はなるべく剪除する。
- ウ 強風雨は、致傷及び水媒により感染を助長するため、防風ネット等の対策を講じる。

## 2) 黒点病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率 2.2 % ( 平年 9.4 % ) と平年比少の発生であった。
- イ 果樹研究所 ( 宇城市 ) の調査 ( 無防除樹興津早生 ) では、8 月 4 半旬の発病果率が 100 % ( 平年 89.6 % ) で平年よりやや多く、発病度は 26.2 ( 平年 35.3 ) で平年よりやや低かった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並 ~ やや少であった。
- エ 気象予報によると、9 月の降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 枯枝が伝染源である。剪定枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に持ち出して処分する。
- イ 降水量 200 ~ 250 mm、または前回散布から 25 ~ 30 日を経過したら防除を行う。週間天気予報等を利用し、計画的に防除を行う。

## 3) ミカンハダニ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 4.6 % ( 平年 10.8 % ) と平年比やや少の発生であった。
- イ 果樹研究所 ( 宇城市 ) の調査では、8 月 5 半旬の寄生葉率は 3.0 % ( 平年 21.0 % ) と平年比少の発生であった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多 ~ やや少であった。
- エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準は、メス成虫寄生葉率 30 ~ 40 %、10 葉当り 5 ~ 10 頭である。
- イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 4) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率 1.0 % ( 平年 3.7 % ) と平年比やや少の発生であった。
- イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並 ~ やや少であった。
- ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤または洗剤の 5,000 ~ 10,000 倍液をコップやビ

ーカーに入れ、その液で果実（100 果）を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡を用いて虫数を調査する。10 頭以上を確認したら直ちに防除する。

## ナシ

### 1) 黒星病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発病葉率 1.5 % ( 平年 0.6 % ) で、平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 9 月以降に増加する秋型病斑は、葉裏面に薄いスス状の病斑を形成する。鱗片に感染した場合、翌春の伝染源となるため、収穫後の防除を徹底する。

### 2) うどんこ病

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発生を認めなかった ( 平年の発病葉率 0.9 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 収穫期から収穫後に発生し早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

### 3) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉率 2.0 % ( 平年 4.3 % ) で平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 本虫の要防除水準は、メス成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ～ 2 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## カキ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発生を認めなかった ( 平年発病果率 0.4 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 発病後の薬剤防除では効果が低いので、薬剤の予防散布を徹底する。

## 果樹全般 ( カキ、ナシ、カンキツ類等 )

### 1) カメムシ類

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 8月の生産環境研究所(合志市) 果樹研究所(宇城市) 天草農業研究所(天草市)における予察灯誘殺数は、8月上旬以降、増加している。
- イ ヒノキ球果一果当りの平均口針鞘数は、8月下旬に行った調査で、合志市が24.2で最も高く、次いで宇城市松橋町が19.7であった。平均口針鞘数が25を超えると、餌となるヒノキ球果からの離脱が始まるとされ、樹園地への飛来の危険性が高まっている。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～少であった。
- エ 気象予報によると、9月の気温は平年並、降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園をよく見回り、早期発見に努める。
- イ 最新の誘殺情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

## 夏秋トマト(高冷地)

### 1) 葉かび病

(1) 発生量：少

- (2) 根拠 ア 夏秋トマト産地で導入されている品種は、ほとんどが葉かび抵抗性品種で、葉かび病の発生を認めなかった。

イ 病害虫防除員からの報告では、葉かび病の発生を認めなかった。

- (3) 対策 ア 抵抗性品種に感染するレースが他県で確認されているため、抵抗性品種でも発病には注意する。発病した場合は、早期に慣行の葉かび病対策を行う。

イ 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

ウ 換気を良くし、過湿防止に努める。

エ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

オ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) すすかび病

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率19.3%であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多であった。

- (3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 3) 灰色かび病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉部への発病株率3.7%(平年26.4%)で平年比少の発生、果実では発病を認めなかった(平年の発病株率2.1%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去し、通風採光を良くする。



イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 夏秋ナス（平坦地）

##### 1) すずかび病

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 7.7 % ( 平年 5.9 % ) で平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

（３）対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

##### 2) うどんこ病

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率 1.6 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

（３）対策 ア 通風採光を良くする。

イ 不要な下葉はできるだけ除去する。

ウ 発病初期から薬剤散布を行う。

#### イチゴ（育苗床）

##### 1) 炭疽病

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率 2.0 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

（３）対策 ア 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去し通風採光を良くする。

イ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、定植時には発病していない健全な苗を定植する。また、ビニール被覆するまでは特に発生に注意し、被害茎葉や被害株は速やかにほ場外に持ち出して処分する。

ウ 次年度用の親株は、無病苗を選抜し、前年に発生の見られたほ場は親株床として使用しない。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努め、風雨の後は防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

##### 2) うどんこ病

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 2.3 % ( 平年 0.2 % ) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

ウ 6月以降、多発傾向だったため、潜在感染している可能性が高い。

(3) 対策 ア 発病葉や潜在感染している可能性のある不要な下葉などを取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

イ 定植前までの防除を徹底し、罹病株を本ばに持ち込まないようにする。また、定植後は活着後から開花期までの防除に重点を置く。

ウ 葉裏に発生するため、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 夏秋キャベツ（高冷地）

##### 1) 細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、軟腐病が0.3%（平年0.7%）と平年並の発生、黒腐病、黒斑細菌病は発生を認めなかった（平年の発病株率 黒腐病2.5%、黒斑細菌病1.7%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

#### 野菜虫害

##### 夏秋果菜類

##### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生葉率 10.3 %（平年 16.3 %）と平年比やや少の発生、高冷地のトマトで寄生葉率 41.0 %（平年 38.9 %）と平年並の発生であった。コナジラミの種類は、平坦地のナスは、全てタバココナジラミ、高冷地のトマトでは、ほとんどがオンシツコナジラミであった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はキュウリで平年比やや多、ナス、トマトで平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場内および周辺の雑草は重要な増殖源となるので、除草する。

イ コナジラミ類に対する防除薬剤は、種によって効果が異なるものもあるので、種を見分け、適切な薬剤を散布する。

ウ 薬剤散布は、下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

##### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生葉率 6.7 %（平年 2.8 %）と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。

イ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

- ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。
- エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。
- オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 冬春果菜類

##### 1) タバココナジラミ

- (1) 発生量：並（前年比）
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生葉率 10.3 %（前年 21.2 %）と前年比やや少の発生であった。  
イ 平坦地の農業普及・振興課が行っている野外のコナジラミ調査では、8月の誘殺数が前年並～やや少であった。  
ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 別枠参照

#### イチゴ（育苗床）

##### 1) ハダニ類

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 40.7 %（平年 14.0 %）で平年比多の発生であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。
- (3) 対策 **ア 本ばでの発生は主に寄生苗の持ち込みによるものが多いため、定植前の防除を徹底する。**  
イ 発生初期は下葉に寄生している。下葉かぎを行うことで、寄生葉が除去されるうえ、薬剤もかかりやすくなる。取り除いた下葉は、ほ場外に持ち出して処分する。  
ウ イチゴのナミハダニは薬剤によって感受性が異なるため、平成 21 年 7 月 17 日付技術情報第 5 号 (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H21/yosatsu/gijyutu090717.pdf>)等を参考に、薬剤防除の計画を立てる。  
エ 葉裏に多く寄生しているため、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。  
オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 夏秋キャベツ（高冷地）

##### 1) コナガ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率 3.3 %（平年 18.0 %）で平年比少の発生であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。  
ウ フェロモントラップによる 8月の誘殺数は、阿蘇市波野と山都町鶴底で平年比やや少であった。  
エ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。  
また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。  
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。  
ウ 収穫残さは発生源となるので、直ちに処分する。

## 野菜全般

### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地ナスで寄生株率 0.3 % ( 平年 1.0 % ) と平年並、イチゴで寄生株率 0.3 % ( 平年 0.9 % ) と平年並、キャベツで寄生株率 1.7 % ( 平年 2.0 % ) と平年並、高冷地トマトでは発生を認めなかった ( 平年の寄生株率 0.1 % )。

イ フェロモントラップによる 8 月の誘殺数は、い業研究所 ( 八代市 )、阿蘇市波野で平年比多、高原農業研究所 ( 阿蘇市 ) で平年比やや多、生産環境研究所 ( 合志市 ) で平年並、山都町鶴底で平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、ほ場をよく見回り若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

### 2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生株率 2.0 % ( 平年 0.1 % ) と平年比やや多、高冷地のトマトでは発生は認めなかった ( 平年の寄生株率 0.1 % )。

イ フェロモントラップによる 8 月の誘殺数は、生産環境研究所 ( 合志市 ) で平年比やや多、い業研究所 ( 八代市 )、高原農業研究所 ( 阿蘇市 ) と山都町鶴底で平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

## トマト・ウリ類の育苗期から定植初期の防除

近年問題となっているトマト黄化葉巻病、ウリ類黄化えそ病、ウリ類退緑黄化病は、育苗期や定植初期に感染すると被害が大きくなります。

作期を統一している冬春トマト産地では、野外のタバココナジラミのトマト黄化葉巻ウイルス保毒率が約1ヶ月で低くなりますが、保毒虫がいなくなるわけではありません。今後の発生を抑制するためには、以下の防除対策を徹底することが必須です。

### < 育苗期から生育初期の防除対策 >

#### **播種・定植前の管理：**

施設周辺及び内部の野良生えトマトや雑草は、ウイルスの伝染源、タバココナジラミ、アザミウマ類の生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の10日前までに除去する。さらに、育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

#### **施設内へのタバココナジラミ・アザミウマ類の侵入防止：**

育苗施設やハウス等の開口部（天井、サイド、換気部など）には目合い0.8mm以下の防虫ネットを必ず設置し、タバココナジラミやアザミウマ類の侵入を抑制する。特に、育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため被覆を徹底する。なお、目合いを小さくするほど侵入阻止効果は高いが、高温対策に留意する。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150cm幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

#### **タバココナジラミ・アザミウマ類の早期発見：**

黄色または青色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミやアザミウマ類の早期発見に努める。

#### **感染源の除去：**

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

#### **薬剤防除：**

防虫ネットのみでは、タバココナジラミやアザミウマ類の侵入を完全には防げないため、薬剤防除を併せて徹底する。また、育苗期後半、定植時には粒剤を施用する。

（注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。）

## 農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤の飛散により、ミツバチや魚介類など周辺動植物や環境へ影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、周辺住民や周辺の農業者・畜産業者・養蜂業者等へ事前に薬剤散布について連絡するなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。

